



TITLE:

ミスC. E. Furness(ファネス)教授を
迎えた日 (倍大號)

AUTHOR(S):

CITATION:

ミスC. E. Furness(ファネス)教授を迎えた日 (倍大號). 天界 1926, 7(71):
60-61

ISSUE DATE:

1926-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161070>

RIGHT:

ミス C. E. Furness (ファネス) 教授を迎へた日

先頃の汎太平洋學術會議に、米國の Vassar 學院からの代表者として、同學院天文臺長ファネス教授が來朝され、教授は、東京の會の後、全議員と共に十一月十二日京都へ着き、ミヤコホテルに入つた。そして同十五日からは市内烏丸通りの Pedley 氏宅に移り、尙ほ數日滞在せられた。

十一月十七日、ファネス教授は、かねての約束により、京都大學天文臺へ來訪せられた。尤も、女史は同十二日の午後、全員と共に京都大學を公式に訪問され、其の節、十數人の人々と共に、山本教授の案内で、天文臺内の諸設備を參觀せられたこゝがあつたから、十七日の日には、全く自由に「新着雑誌でもゆつくり見せて貰ひたい」こいふ希望であつた。それで此の日天



比叡山上のファネス女史と山本夫人



比叡山より展望中の兩女史と其の他の一行

文臺に着かれて一時間餘りの間は、南館の雑誌室のストーヴの側で、獨り靜かに讀書せられた。

午後四時、山本夫人の斡旋で、南館階上の談話室に御茶の會が催され、ファネス女史を主賓とし

て、山本、上田、荒木三氏、其の他七人の大學生たちと暫く雑談が交はされた。其の中で、山本教授のすゝめにより、女史は立つて、米國出發から日本に着くま

での旅行談、それから、今後、日本を立つて歐洲への旅行計畫なごを話された。ジョンストンの世界地圖を指しつつ、女史が語られた所によるご、女史は去る六月に米國ニウウク港を出帆し、南下してパナマ運河を通り、メキシコの西岸を北航し、ロスアンゲルスで一旦下船、バサデナ市の井ルソン山天文臺に約一ヶ月滞在して、主に太陽研究上の調査をせられた。それから、カリフォニアを北上し、リク天文臺で數日を費された後、サンフランシスコから船で、ハワイに渡り、更に又航海を續けて十月初め横濱に着かれたのであるごいふ。今後は、十一月二十七日、神戸から乗船、上海、香港を経て、シンガポアで乗り換へ、オランダ領のジャバで數週間を費し、更に英領印度へ轉じて、カルカタから内地に入り、ハイデラバド、ボンベイ、マドラスの順に旅行し、コダイカナル天文臺へも、若し都合好ければ訪問。それからコロンボで乗船、エジプトを経、イタリアのナポリで上陸。ロマ、フィレンチエを歴訪し、後、フランスに渡り、パリで暫く滞在。次いで英國に渡り、1927年六月二十九日には北部イングランドで日食觀測の豫定だごいふ。但し、漫遊旅行中なので、此の觀測には大した器械を使はず、ごく簡單な直視分光器で閃光スペクトルを視る積りだごいふ。なにぶん、此の日食は皆既時間が24—5秒ごいふ短かいものでもあるのだから、——日食の後、女史は再び歐洲大陸へ渡つて、オランダあたりの數ヶ所の天文臺を訪ひ、七月頃、米國へ歸られる豫定であるごいふ。

御茶の會は五時半に終つて、女史は案内されて、吉田山上の東洋花壇に行かれ、山本家の家族と共に「ぎうなべ」の夕飯を取られた。(女史は1918年にも日本へ來られ八九ヶ月も滞在せられたごがあるのです、日本の衣食住については一通り以上の通である——ごいふのが、女史の御自慢であるごの噂である。)

新城博士の渡支

第三回汎太平洋會議重要な役目の重荷をおろされた、新城新藏博士は、今度東方文化

事業の日本側委員として、十二月二日神戸出帆長崎丸にて上海に向はれた。そして會議後同地方の視察を終えられて十二月二十日歸朝せられた。